2. 事業の概要と成果	
<p>(1) プロジェクト目標の達成度 (今期事業達成目標)</p>	<p>【プロジェクト目標】 フィリピン国パタグ村、及びネグロス島高地において、日本のイチゴの栽培技術・観光農園運営手法を取り入れて、高付加価値のイチゴの栽培・流通・販売体制の構築を目指す。</p> <p>【達成度】 パタグ村において、日本企業2社の遠隔支援を受けながら、イチゴの栽培を本格的に開始した。他地域への展開はコロナ禍により遅れている。加工場の建設を行い、販売体制の準備が整い、3年次に販売を本格化する。大型台風で大きな被害を受けるも修繕を行い、ハードウェアは目標通りに整備できた。</p>
<p>(2) 事業内容</p>	<p>(ア) イチゴ栽培用の農地の整備 ビニールハウス等の建設用の4農場を整地した。これにより、ビニールハウス等の建設の準備が整った。</p> <p>(イ) ビニールハウス、タンク等の建設 コロナ禍により建設会社の変更ののち、農場1~4にイチゴ栽培用のビニールハウス6棟、タンクを順次、建設し、外構を整えた。給水のパイピングも建設工事が終了した。今後、ビニールハウスがイチゴ栽培に適するように調整する。</p> <p>(ウ) 高設栽培用の架台の設置 個々のビニールハウスの内部に、高設栽培用の架台を設置する。高設栽培にすることにより、作業者の負担の軽減、観光客のピッキングに配慮した。</p> <p>(エ) 土壌作成、苗の育成 BAFAが中心となり土壌の作成と苗の育成を行った。栽培に最も重要な土壌は3年間のスタートアップの経験から、牛ふんコンポスト、もみ殻燐炭、現地の農場土壌を使用して配合した。ハイポネックスジャパンの遅効性化学肥料を若干添加する。台風被害で苗の本数を減らしたが、親苗をすでに9,000株育成している。</p> <p>(オ) 日本人専門家の派遣によるパタグ村に適した管理手法を実証 三重県でイチゴ栽培に従事する「いのさん農園」の専門家による、パタグ村の栽培農場にて、パタグ村に応じた栽培方法、減化学肥料を実現するための研修を実施する計画であった。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大により、中止した。 代替手段として、マニラ近郊の経済特区で合弁事業を営み、苗、農薬等を販売するMKP, INCの専門家のアドバイスを受けている。 本事業の目標である、苗を販売してイチゴ栽培をネグロスに広めること、イチゴの果実を広域に販売することから、MKP, INCとは苗の流通、イチゴの果実のマーケティングで共同することを確認した。 肥料に関するアドバイスをハイポネックスジャパン社にお願いすることとした。</p> <p>(カ) 日本での研修事業 BAFAのメンバーの1名が日本人専門家の農場で、イチゴ栽培のGAP (Good Agricultural Practices) 等で2週間の研修を受ける計画であった。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大により、中止せざるを得なかった。</p> <p>(キ) 品質の安定化と収量の増加 有機液肥の成分割合、液肥の供給・頻度、農薬に代わる有機資材等がノウハウとして蓄積された。生産効率は日本の1/2である1.0t/年・10a程度であり、さらに改良を加える必要がある。</p>

	<p>(ク) 加工場の建設 イチゴジャム製造するための加工場（直販所を兼ねる）をメインストリートに沿った敷地に新設した。本格的な稼働は3年次である。</p> <p>(ケ) セミナーの開催 市長、議員、村長、住民団体役員、環境資源省出先機関が参加して、プロジェクトの概要を説明し、イチゴを核とした観光農業に賛同を得た。</p> <p>(コ) 台風22号によるハウス損壊に対する修理 全壊は1棟、一部損壊（ビニールの破れ等）は4棟で、すべて原状復帰を果たした。苗に大きな被害が出た。</p>												
<p>(3) 達成された成果</p>	<p>指標に基づく成果</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th data-bbox="443 725 639 875">期待される 成果</th> <th data-bbox="639 725 868 875">成果指標</th> <th data-bbox="868 725 986 875">2年次 の目標</th> <th data-bbox="986 725 1479 875">2年次の成果</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="443 875 639 1715">現地に適合した技術、設備を使用して、高品質イチゴ(糖度10~12、一粒の重量12グラム)の栽培が可能となる</td> <td data-bbox="639 875 868 1715"> ① 温室数(棟) ② BAFA 栽培農家数(戸) サブコア地域(戸) 隣接地域(戸) ③ BAFA 栽培本数 サブコア栽培本数 隣接地域栽培本数 ④ 日本での研修(人) ⑤ 糖度 ⑥ 一粒重量(g) ⑦ 1株当たりの果実 </td> <td data-bbox="868 875 986 1715"> 6 6 9 10 9,000 4,500 5,000 1 10 10 8 </td> <td data-bbox="986 875 1479 1715"> コロナパンデミックと台風被害により、ハードウェアの建設、修理に労力を奪われた2年間であった。しかし、ハードウェアの整備は予定通り達成された。①温室6棟、加工場1棟の建設が完了し、生産拡大とジャムの加工にめどがついた。 ②BAFA内の栽培農家数は10農家、サブコア地域、隣接地域において12農家で、5,000本以上の栽培を実施している。 ③BAFAの栽培本数は台風被害、高温障害のため、若い苗9,000に留まっている。想定した生産量に到達できていない。気温を下げるミストノズルを一部のハウス内に実験的に設置し、障害を克服する手段であることを確認した。④日本での研修をコロナ禍により、中止した。⑤⑥糖度(10)、一粒重量(12g)を確保した。⑦ただし、1株当たりの果実が少ない(4個程度) </td> </tr> <tr> <td data-bbox="443 1715 639 2087">資材、人材が整い、高設栽培システムを構築し、果実の生産性が日本の半分の1.43t/年・10aに向上する</td> <td data-bbox="639 1715 868 2087"> ① 10a当り収穫量/年 ② BAFA 果実販売額(万円) (1,2,3年次総収入) ③ BAFA 苗販売(千本/年) ④ BAFA 苗販売額(万円/年) </td> <td data-bbox="868 1715 986 2087"> 1.2t 115 9.5 190 </td> <td data-bbox="986 1715 1479 2087"> ①台風前で約1.0トン/反の生産性に到達している。②販売は生産が台風被害などにより、本格化していないため、少量である。③④苗の販売をまだ、開始していない。⑤生産量が少ないため、一農家当たりの収入向上もまだ見られない。 日本での研修事業、オンサイトでの研修事業の開催に替わり、肥料のア </td> </tr> </tbody> </table>	期待される 成果	成果指標	2年次 の目標	2年次の成果	現地に適合した技術、設備を使用して、高品質イチゴ(糖度10~12、一粒の重量12グラム)の栽培が可能となる	① 温室数(棟) ② BAFA 栽培農家数(戸) サブコア地域(戸) 隣接地域(戸) ③ BAFA 栽培本数 サブコア栽培本数 隣接地域栽培本数 ④ 日本での研修(人) ⑤ 糖度 ⑥ 一粒重量(g) ⑦ 1株当たりの果実	6 6 9 10 9,000 4,500 5,000 1 10 10 8	コロナパンデミックと台風被害により、ハードウェアの建設、修理に労力を奪われた2年間であった。しかし、ハードウェアの整備は予定通り達成された。①温室6棟、加工場1棟の建設が完了し、生産拡大とジャムの加工にめどがついた。 ②BAFA内の栽培農家数は10農家、サブコア地域、隣接地域において12農家で、5,000本以上の栽培を実施している。 ③BAFAの栽培本数は台風被害、高温障害のため、若い苗9,000に留まっている。想定した生産量に到達できていない。気温を下げるミストノズルを一部のハウス内に実験的に設置し、障害を克服する手段であることを確認した。④日本での研修をコロナ禍により、中止した。⑤⑥糖度(10)、一粒重量(12g)を確保した。⑦ただし、1株当たりの果実が少ない(4個程度)	資材、人材が整い、高設栽培システムを構築し、果実の生産性が日本の半分の1.43t/年・10aに向上する	① 10a当り収穫量/年 ② BAFA 果実販売額(万円) (1,2,3年次総収入) ③ BAFA 苗販売(千本/年) ④ BAFA 苗販売額(万円/年)	1.2t 115 9.5 190	①台風前で約1.0トン/反の生産性に到達している。②販売は生産が台風被害などにより、本格化していないため、少量である。③④苗の販売をまだ、開始していない。⑤生産量が少ないため、一農家当たりの収入向上もまだ見られない。 日本での研修事業、オンサイトでの研修事業の開催に替わり、肥料のア
期待される 成果	成果指標	2年次 の目標	2年次の成果										
現地に適合した技術、設備を使用して、高品質イチゴ(糖度10~12、一粒の重量12グラム)の栽培が可能となる	① 温室数(棟) ② BAFA 栽培農家数(戸) サブコア地域(戸) 隣接地域(戸) ③ BAFA 栽培本数 サブコア栽培本数 隣接地域栽培本数 ④ 日本での研修(人) ⑤ 糖度 ⑥ 一粒重量(g) ⑦ 1株当たりの果実	6 6 9 10 9,000 4,500 5,000 1 10 10 8	コロナパンデミックと台風被害により、ハードウェアの建設、修理に労力を奪われた2年間であった。しかし、ハードウェアの整備は予定通り達成された。①温室6棟、加工場1棟の建設が完了し、生産拡大とジャムの加工にめどがついた。 ②BAFA内の栽培農家数は10農家、サブコア地域、隣接地域において12農家で、5,000本以上の栽培を実施している。 ③BAFAの栽培本数は台風被害、高温障害のため、若い苗9,000に留まっている。想定した生産量に到達できていない。気温を下げるミストノズルを一部のハウス内に実験的に設置し、障害を克服する手段であることを確認した。④日本での研修をコロナ禍により、中止した。⑤⑥糖度(10)、一粒重量(12g)を確保した。⑦ただし、1株当たりの果実が少ない(4個程度)										
資材、人材が整い、高設栽培システムを構築し、果実の生産性が日本の半分の1.43t/年・10aに向上する	① 10a当り収穫量/年 ② BAFA 果実販売額(万円) (1,2,3年次総収入) ③ BAFA 苗販売(千本/年) ④ BAFA 苗販売額(万円/年)	1.2t 115 9.5 190	①台風前で約1.0トン/反の生産性に到達している。②販売は生産が台風被害などにより、本格化していないため、少量である。③④苗の販売をまだ、開始していない。⑤生産量が少ないため、一農家当たりの収入向上もまだ見られない。 日本での研修事業、オンサイトでの研修事業の開催に替わり、肥料のア										

		⑤ BAFA 一農家 収入 (万円/ 年) サゴ農家収入 (万円/年) 隣接地域農家 収入(万円/年)	30.7 6.4 6.4	ドバイスを日本のハイポネクスジャ パン社、苗の育成について日本の MKP 社からオンラインで受け、効果 をあげている。
特産品として 高品質イチゴ が認知され、 販路が倍増す るとともに、 観光農園によ り、パタグ村 の観光客が 20%増大す る。以上によ り Patag 村の 世帯所得が平 均 20%向上す る。		① BAFA 生産量 (t/年) ② 果実・苗売上 高 (万円/年) ③ 加工場顧客 数 ④ 加工場のイチ ゴ消費(t) (ジャムと果 実) ⑤ 売上高 (万 円)	0.72 305 1,500 0.45 90 - -	①②BAFA の生産量は台風、高温障害 の影響があつて、0.152 kgであり、販 売額は約 27 万円である。目標に比べ て一桁少ない数値となっている。 ③④⑤加工に回すイチゴ成果は現在 ないため、実稼働を 3 年次に持ち越 す。 市長、村長、議員、住民代表参加の 小さなセミナーを開催できたこと は、隣接地域への展開や観光化の計 画に弾みがつくと考える。
(4) 持続発展 性	<p>・今後生産を拡大することにより、収益を確保し、施設の減価償却分を内部留保し、持続可能な事業とする。</p> <p>さらに行政と連携し、農家向けのセミナーをイカオ・アコと共同で継続的に開催する。これと連動して、希望者に BAFA がイチゴ栽培方法の実地指導を有料で行う。</p> <p>・ネグロスの高地の農家からイチゴ栽培の協力を求められており、州政府の動きと合わせてイチゴ栽培の横の広がりを目指す。</p> <p>さらに、シライ市役所と村議会と協議しながら観光農業をさらに充実させたい(他のフルーツ農園や新 Trimline との連携などが考えられる)。既存のリゾートからの期待度も大きく、成果やジャムの販売、お土産品の開発などで協働を模索する。将来、観光客を倍増させ、地域の波及効果を上げる。</p> <p>・品質、安定収量、価格面で他地域の追随を許さないレベルのイチゴ成果を産出し、販売が好調に推移する 3 年後に、果実をフィリピン全土への出荷を計画する。ワールドマーケットの調査、出荷の障壁の調査、傷みやすいイチゴを衝撃から守るパッケージング開発など関係組織と連携して作業を進める予定である。</p> <p>・本事業で購入したトラック、建設したビニールハウスと付属品は事業終了後、住民組織 BAFA に MOU に基づき譲渡し、残り 1 年の事業期間で住民は独自で生産と販売できる能力を獲得する。</p>			